事　務　局　雑　感

第１５回岡崎大会から

今大会は開催時期が、予定より２か月早くなったので、種ボタル採取や、ホタル祭と重って出席者が思ったより少なかった。そのため事務局も原稿の募集、編集に気を使った。

本大会が翌日開催というのに、地元河合中学主催の「自ら汗する」教育研究発表があって、会場準備などであてにしていた古田氏が学校の主役メンバーのため学校から離れられないとのことで、相談が出来ず、やっと夜９時頃から打合せにかかり準備にはいるといった有様だった。

いっぱう総会では２年越しの規約改正。表彰の件などともに審議に時間がかかって、またまた事務の後遺症を残しはしないかと神経を使った。

本会の規約は全国的組織だから、それにふさわしいものでなくてはならない。といった強い意見があった。表彰についても会長から度々要望があって、役員会で検討したが選考の基準を決めることはむつかしく、結論は得られないまま総会では、追ってこの基準案を作ることになった。

私は８年、事務局をやってみての実感は、実情に合わない点は改正しなければならないが、優等生型の規約を作ってみても果して生かされるかどうか。なぜなら総会ならびに役員の出席率は平均２５％前後と低率で総意は得られない。そこで多くの会員に意見を求めてもその回答率はきわめて低い。

これは本会の体質、すなわち官公庁や会社のように組織が縦割でなく、横のつながりであるうえに年令、職業など全く制約がなく、ひたすら環境保全、ホタルの保護、増殖を図るための研究および啓蒙活動を行うという趣旨に賛同した同志の集まりであるからと思う。

総会が終ってから「規約や表彰にこだわりすぎるとこの会は潰れてしまう。研究の深さと会の和を保つことが大切だ」というご意見をいただき、会の運営方針に間違のないことを確認して救われた思いがした。

それからパーティに出席の市会議長から「政治の社会のみにくさに比べ、非常に和気合いあいの会でこんな楽しい会に出席したのははじめてだ」との言葉をいただきうれしかった。

夜の座談会は深夜まで続き、研究もその厚さを増し、研究発表中に１人として席をはずす人もなく、この熱っぽい研究慾は本会の誇りである。

見学ではユニークな分子研究所に出かけ、知識を広めたが、お世話下さった古田、萩原、三矢氏にお礼申し上げる。

朝日新聞全国版の家庭欄掲載記事から

５５年に朝日新聞の「青鉛筆」欄でホタル愛護バッジが紹介されたときと同様、今回も大きな反響をよんだ。

その主なものを拾ってみると、

家の庭に人工川を作って飛ばせたい。休耕田を利用して養殖を試みたい。コンクリートの護岸工事が進

行しているが、せめて残された数１０mでもホタルが住みつく工法はないか、それにはどこへ陳情したらよいか。付近の小川でホタルを飛せたいが、どうしたらよいか。その他女子高校生や中学生から、ホタルに憧れる手紙などが多く届き感激した。

これら全部の方にいちいち返事を差上げたが、この記事からの新入会員が10名あった。